

## 編集委員長に就任して

加 藤 健 三\*

昭和 56 年度の日本鉄鋼協会の総会および理事会を経て、今回、編集委員長の大任をお引き受けすることになり、誠に光栄に存じている次第であります。

日本鉄鋼協会の活動は 1970 年代に入つて鉄鋼工学の進歩とともに、ますますその輝きを増し、国際的評価も飛躍的な発展を示しました。現在、80 年代の初頭に当たり、日本鉄鋼業の新しい時代への対応、基礎から開発に及ぶ研究態勢の確立など重要な課題を考えると、鉄鋼協会誌としての「鉄と鋼」および「Trans. ISIJ」の果たす役割の大きさをつくづくと考えている毎日です。

以下、委員長に就任して日浅く、適当でない表現もあるかもしれませんが、敢えて愚見を述べさせていただきます。

1) 和文誌につきましては、田中前委員長のご努力および小委員会の活躍により、会報としての今日的な解説も増加し、優秀な研究論文とともに、その内容を豊かなものにしており、会員の皆様の大きな関心をいただいているようで、心から喜ばしく思っており、この方針は今後とも引き継ぎ発展させたいと思っております。なお、投稿論文の数も増加しておりますので、論文をまとめるに当たり、無駄な表現を省き、緻密な形式にまとめていただき、1 論文当たりのページ数をできるだけ少なくしていただければ、さらに多くの発表を掲載することができるものと考えており、この点、会員の皆様のご理解をお願いいたしますと存じております。

2) 英文誌につきましては、最近、春秋の講演大会からの英文アブストラクトを掲載することになり、高い評価をいただいているようで、喜びにたえないところでありますが、さらに、主査はじめ委員各位のご努力により、アブストラクトを研究速報に変更し、研究業績として考えられるように改革がなされようとしていることに敬意を表したいと思います。

3) 和文誌と英文誌の関係につきましては、従来は和文誌に発表されたものを順次、英文に書き改めて英文誌に掲載していた場合が多いようでありましたが、諸外国からの情報によりますと、和文で発表した論文の主なるものはすでに外国で翻訳されて読まれている由であり、それ自体は日本鉄鋼工学およびその研究評価の高さを示す事実として喜ばしいことではありますが、かなり遅れて英文誌に出るような現状では、研究発表の効果も削減されるおそれがあるのではないのでしょうか。この意味からすれば、対外的に発表した方が有利であると判断される内容のものは、むしろ最初から英文で発表する方が得策であり、版權から言つても有利と考えられます。しかし、和文として国内的にも評価をうけたいものも多いと思われしますので、それぞれの内容を吟味の上、判断を下すべきでありましょう。

4) 若い会員、とくに学生会員の増強についてであります。小生も学生時代、三島徳七先生に入るように言われ、若い時代から会員にさせていただきましたが、昨年、訪欧の機会に恵まれ、BSC の Welsh Laboratory を訪問することができましたが、研究部長が言うには、英国では鉄鋼に学生がなかなか来てくれないということで、その点につき長時間討論をいたしました。日本では鉄鋼を志望する学生数はかなり多くを数えることができます。そこで一つの提案ですが、大学側でも若い教官を加えて大いに学生に参加を呼びかけることはもちろんですが、鉄鋼各社で活躍されている先輩各位におかれましては、何らかの機会を生かして呼びかけを行つていただきたく、お願い申し上げます。

以上、現在の時点で頭に浮かんできた問題を述べさせていただきましたが、今後ともさらに、講演大会の増加にともなう会場の大きさの問題、便覧などの出版事業、また、国際会議プロシーディングの出版など鉄鋼協会として推進して行くべき課題も多く、2 年間の大任を果たすためには会員皆様の貴重なご意見を期待しております。終わりに、編集委員を選出して下さっている大学、研究所、鉄鋼各社に対して、また、鉄鋼協会の担当者に対して、心からの感謝を申し上げますとともに、今後のご活躍をお祈りする次第であります。

\* 大阪大学工学部教授 工博